

# 漢語語彙のメタファーに関する研究

—中国語との対照を通して—

(要旨)

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号 : D110449

氏 名 : 李愛華

本論文は、日中対照研究を基礎として、漢語語彙におけるメタファーの研究を扱っている。

日中対照言語学の研究は、近年、日本語研究者と中国語研究者の成長と増加によって大きな発展を見せている。日中語彙対照研究も日中语法対照研究に次いで、注目の研究分野となっている。しかしながら、メタファーによる意味拡張の観点から行った日中対照研究のほとんどは、主に色彩語、イディオム、五感の形容詞といった個別語の対照研究に集中していて、語彙を意味によって分類し、体系的に日中メタファー表現の対照を行う研究はあまり見られないようである。こうした状況に鑑み、本論文では、2010年度の『朝日新聞』と中国語の《人民日報》の社説から漢語語彙のメタファー用例を取り出し、漢語語彙におけるメタファーの日中対照研究を試みることを主な目的とする。

本論文は序章を含む全9章で構成される。具体的な内容は以下の通りである。

第1章の序章では本論文の背景と目的及び構成について述べる。漢語語彙におけるメタファーには、日中両言語に共通するものもあれば、日本語か中国語の一方にしか見られないものもある。それに、「基本的な意味」は同じであるにも関わらず、拡張された意味用法は必ずしも一致していないものもある。本論文は、漢語語彙の実際の用例に基づき、それぞれの表現の本来の意味のどのような特徴に注目し、どのようなメタファーに基づき、新たな意味に拡張しているかを検討することによって、漢語語彙におけるメタファーの実態を明確にし、中国文化と日本文化の世界に対する捉え方の共通点と相違点を明らかにしようとする。

第2章では、メタファーに関する伝統的な理論と本論文が用いる認知言語学に関する理論を概観し、メタファーの形式と同定について述べた後、本研究の実例分析に関わる重要な先行研究について述べる。

第3章では、本論文で用いるデータと分析方法について論じる。分析に使用する主なデータは2010年度の『朝日新聞』と中国語の《人民日報》の社説である。漢語語彙のメタファー用例を取り出し、日本語は、国立国語研究所の『分類語彙表』(2004)、中国語は漢語大詞典出版社の《現代汉语分类大词典》(2007)

の分類項目に従って意味分類を行ったうえで、本論文におけるメタファーの使用を量的に概観する。モト領域となりやすい領域とサキ領域となりやすい領域を挙げてリストを作り、さらに、特定の領域が特定の領域とペアの形でメタファーを構成するパターンを抽出して、両言語における意味拡張の傾向及び体系性も分析する。

第4章では、モト領域を固定した事例の研究として、頻出語数が最も多いメタファー表現の分析を行う。漢語のメタファー用例を取り出し、『分類語彙表』の分類項目に従って意味分類をすれば、「自然物および現象」の下位項目に分けられている漢語語彙の頻出語数が最も多いことが明らかになる。「自然」、「物質」、「天地」、「生物」、「身体」、「生命」と細かく下位分類されているが、量的データの分析では、人間にまつわる「身体」と「生命」に分類されている語が最も多いことが分かる。本章では、人間にまつわる漢語語彙がメタファーに基づき多様な意味に拡張された事例研究を行う。身体部位は我々にとって非常に際立つ存在のものであり、認知しやすいものであるため、身体部位を表す語彙が構造的な位置づけ、形状（形や大きさ）、機能に基づき、思考、行為などへと多岐にわたって多様な意味に拡張される。構造的な位置づけと形状の類似性に基づくメタファーにおいては、身体部位の構造的な位置づけや形状が物体の部分との間に、視覚的類似の関係を見いだすことができ、それに、サキ領域は殆ど表面的で、具体的なものに集中している。一方、機能に基づくものには、サキ領域は抽象的な概念を指す場合が多い。なお、我々は身体を介して日々様々なことを経験する。人間の身体経験に基づく用語は、人間以外と共用され、比較的抽象的な政治、経済、交通、国家関係や社会政策、法規など異なった領域に写像され、メタファーによって意味が拡張されている。これらの意味の拡張は、身体を何らかの行為をする際の道具として捉えることに端を発しており、各身体部位が喚起するそれぞれの典型行為（典型機能）によって表されている。

第5章の前半では、モト領域を固定した事例の研究として、本来は「物質の状態変化」を表す「蒸発」、「沸騰」、「昇華」、「結晶」といった表現に焦点を当て、それぞれの意味拡張に実際にどのような認知プロセスがかかわっているかについて考察する。その結果、「物質の状態変化」を表す言葉として、日中両言語におけるこれらの漢語の「第一義」は同じであるにも関わらず、メタファ

一に基づき拡張された意味用法が完全に一致する場合も一致しない場合もあることが判明した。「物質の状態変化」を表す語彙がメタファーという比喻に基づき、資産や資金、思想、芸術、国際関係と様々な分野に意味が拡張されており、その背景には、従来の研究で言及された《人間の身体は容器、感情や気質は内容物》という、非常に一般的な概念メタファーと、《感情は水である》、《言葉は水である》、《群集は水である》、《金は水である》という概念メタファーとが関わっている。後半では、語義の推移の観点から「蒸発」という語を取り出し、語義の変化は、具体的にいつ頃、またいかなる背景のもとに生じたのであろうかを通時的に分析する。語義が時代の推移につれて異なった様相を示すことが分かってきた。

第6章では、「住居」の主構造を構成する「土台」、「壁」、「大黒柱」、副構造のうちの「天井」、「敷居」、「玄関」といった表現が、メタファーの理論に基づき、新たな意味に拡張される場合を主な考察対象とする。「住居」は私たちの生活において不可欠な「容器」であるため、本来は「住居」を表す言葉が人間の営みや状態などを表現するように様々な多義性を持ち始めている。「大黒柱」、「土台」がメタファーに転換するときには、「支えること、支えられること」という構造上の類似性が見出される。「壁」、「敷居」、「玄関」がメタファーに転換するときには、「住居という容器の内外を限る」という共通する特徴が受け継がれている。「天井」がメタファーに転換するときには、「量が多いことや地位が高いことは上、量が少ないことや地位が低いことは下」という「上下」の位置関係が関わっている。

第7章では、第4章～第6章のモト領域を固定した研究とは逆に、サキ領域を固定したメタファーの研究事例として、ある目的を実現するためにとられる「手段・方法」という抽象概念が日本語話者と中国語話者によってどのように意味づけされ、認知されているかを考察する。その結果、「手段・方法」を表すメタファーのモト領域としては、「経路」、「道具」、「治療や医薬品」、「身体部位語彙」、「抛り所」、その他などさまざまなものが挙げられることが判明した。その基盤として考えられるのは以下の通りである。すなわち、「手段・方法」と「経路」、「道具」、「治療や医薬品」から「始まり→経過→終わり」という＜線と移動＞のイメージ・スキーマが共通して想定され、「身体部位語彙」から「物

体との接触を通して物事との関与をとらえる」というイメージ・スキーマ、「生命や財産を守る拠り所」から「容器」のイメージ・スキーマを想定することができるからである。

第 8 章では、「自然現象」の領域に由来する語と「感情」の領域に由来する語がともに表現される慣習的メタファー表現（感情を表す語+ノ格+自然現象を表す語というパターン）に注目する。「感情一般」、「欲望」、「喜悦」、「希望」、「失望」、「恐怖」と 6 種類の感情表現を抽出し、それぞれが「水」、「火」、「光」、「地」、「風」と、どのような自然現象の観点から理解され、その写像にどのような構造的な一貫性があるのか、また、類似する感情や反対関係にある感情を特徴づけるメタファー写像についても考察する。人間は共通の身体的経験や生理的反応があるため、日中両言語に自然現象をモト領域とする共通例が存在している。このことは異なる言語間においても認知的に普遍的なものの存在を裏付ける要素になり得る可能性が示唆されている。

第 9 章の結論では、まず、第 8 章までの分析と考察を踏まえて、共通性と文化相対性の視座から日本語と中国語における漢語語彙のメタファーの実態をまとめる。日本語と中国語には異なる言語であるにも関わらず、数多くの共通点が見られる。それは異なる民族の間に見られる論理的思考の同質性によるものと思われる。一方、言語が歴史的・文化的存在である以上、言語間にいろいろな細かな差が見出されることは、むしろ当然である。最後に、この研究を通しての問題点などを踏まえ、今後の課題について考える。